

年少者に対する日本語教育

—春休みこども日本語教室の実践結果をもとに—

小畑美奈恵・二田さち子
田川 恭識・瀧上 裕子

§ はじめに

平成12年度に文部科学省が全国の公立小・中学校などを対象に行った調査によると、日本の小・中学校に在籍している日本語指導の必要な外国人児童生徒の数は、17,443人（平成12年9月1日現在、文部科学省調べによる）に上るといふ。その内訳は、留学生や研究生の子弟、中国帰国者の子弟、南米からの日系人子弟、インドシナ難民の子弟などで、その数は今後ますます増加することが予想される。

2001年春、熊本県立大学日本語教育研究室では、普段教える機会の少ない「児童生徒」を対象に日本語教室を開講した。3月27日（月）から30日（木）の4日間、春休みを利用しての教室であった。場所は、外国人子女教育受入推進地域センター校にも指定されている熊本市立黒髪小学校である。集まった子供たちは15名。それを教師4名で4クラスに分けての授業となった。クラス分けは、①滞在歴②年齢③母語の三つの観点から行った。詳細は以下のとおりである。

Aクラス（初級Ⅰ） 授業担当者：小畑美奈恵

滞在歴：2～8ヶ月

年齢：小学校低学年

母語：中国語（1名は朝鮮語が母語だが中国語も可）

Bクラス（初級Ⅱ） 授業担当者：二田さち子

滞在歴：3～4ヶ月

年齢：小学校中・高学年

母語：中国語

Cクラス（初級Ⅲ） 授業担当者：田川恭識

滞在歴：1ヶ月未満

年齢：中学生

母語 : 韓国語

Dクラス(中級) 授業担当者: 淵上裕子

滞在歴: 6ヶ月～2年4ヶ月

年齢: 小学校中・高学年

母語: 中国語(1名は朝鮮語が母語だが中国語も可)

以下、クラスごとに問題点を取り上げ、考察を行うことにする。なお執筆は、各クラスの授業担当者による。

Aクラスの場合 担当: 小畑美奈恵

1. クラスの概要

クラス名: Aクラス

学習者: 女子4名	学年	滞在歴	母語
	小1	2ヶ月	中国語
	小1	3ヶ月	中国語
	小1	9ヶ月	中国語
	小2	8ヶ月	韓国語(朝鮮族、中国語も可)

2. 年少者に対する日本語教育についての先行研究

- ・学習者の知的発達段階に応じた内容を選ぶことが大切。日本語が不完全だからといって実年齢より低い学年向きの内容の教材は好ましくない。(池上1994)
- ・意味のある学習活動を、楽しく、興味を引けるものとして学習者に提示してやる必要があるため、作り事ではないリアルで自然な材料と状況を準備し、活用することが大切である。(同上)
- ・どうやって時間いっぱい勉強させるか、飽きさせないようにするか、楽しく学べるか、が第一。認知能力の発達段階や興味の対象に配慮して学習者が意欲を持って取り組めるような教材選びが大切。(1998)『外国人児童生徒のための日本語指導—カリキュラム、ガイドラインと評価—』
- ・学校生活の様々な場面で使われる日本語が自然に習得できるように観察や体験を豊富に取り入れた教材が望ましい。詳しく言うと具体的場面や情報を十分に与え

ながら学習者自身が観察や体験を通してそれらの情報を解釈していけるような活動が取り入れられている教材。(同上)

- ・視覚にも聴覚にも訴える教材。身体全体で日本語を習得していけるように五感全てを刺激し、単調にならない工夫が必要。(同上)

3. 目的、方法

以上の先行研究をもとに、教材についてAクラスは初級、ということでもまず、語の確認、単語がどの程度定着しているかを確認し、学校生活の様々な場面で使われる日本語を使えるように、という目的のもと、「語彙中心」の教材を選んだ。また学習者の年齢を考慮し、飽きさせないよう、単調にならないようにすべて15分程度でできるゲーム感覚で学べる教材を中心にした。身体全体で日本語を習得していけるように五感全てを刺激し、具体的場面や情報を十分に与えながら学習者自身が観察や体験を通してそれらの情報を解釈していけるような活動を考えた。

4. 使用教材

[ひらがな、かたかなの定着確認]

- ・あいうえお迷路

[単語の導入、確認]

- ・教室にあるものに名前カードを貼り付けるゲーム(鉛筆、黒板、机・・・など)
- ・塗り絵(自由に色をぬらせた後、塗った色を確認させる)
- ・神経衰弱(動物や文房具とその名前を一致させる)
- ・仲間集めゲーム(既習の単語をグループに分け、同じ種類の単語を集めて語彙の復習をする)
- ・しりとり
- ・違うもの探しゲーム(既習の単語をランダムにいくつか並べ、その中から一つだけ種類の違うものを探し、書き取る。さらにその理由も書く)
- ・福笑いゲーム(身体の部分の名称を確認する)
- ・ビンゴゲーム

[特殊拍の定着]

- ・動物の鳴き声ゲーム(擬音語をカタカナで書かせる、拗音、長音、促音の定着)
- ・デリバリーゲーム(電話で注文→注文を受けて書き取る、拗音、長音、促音混じりのメニューを聞き取り、カタカナで書き取る)

[その他]

- ・視力検査ゲーム（位置表現の練習、動詞の否定形の表現の練習）
- ・絵日記（単語から文へ）

5. 授業の実際とまとめ

実際の授業では1番来日期間が短い学習者（あいうえお、あいさつ程度の日本語しかわからない）がいつも取り残されてしまう、という状況があった。子供というのは自分の感情をそのまま表に出す。例えば、4人とも通っている学校が違い、友達ではないから早くできた学習者はまだできていない学習者に対して「まだできないの？」と言うし、それにたいしてできていない学習者は焦りを感じ「もう勉強したくない」という気持ちになってしまう。そこで、「・・・ちゃん、早くできたね、じゃあ、・・・ちゃんにもおしえてあげよう。」と教師は声をかけた。最初は戸惑っていたが「私はもうできた、私は日本語ができるんだからもっと難しいことを勉強したい。こんなことがまだできないの？」と言っていた学習者も、「ここはね・・・」と周りの学習者に中国語で説明してあげたりするようになり、「私だけじゃない、みんないっしょに勉強しているんだ」という気持ち、「いっしょにがんばっていこう」と言う気持ちが双方に芽生えたのではないかと思う。また、Aクラスのような年少者は学習者自身の性格にもかなり考慮して教室活動を進めていく必要があると感じた。積極的で人見知りをしない学習者は周りの学生や教師とすぐに溶け込めるが、おとなしくてあまり自分を表にだすことのできない学習者は周りの学生の積極性を見て、圧倒される。引いては、間違えることが怖くなって言葉を発することをためらったり、持っているはずの能力も十分に発揮できないまま自信をなくしてしまったりすることもあったようだ。教師はとにかくどの学習者に対しても、ひとりひとり平等に「ほめる」ことがいかに大切かがわかった。「ほめる」ということが学習者の自信につながり、学習意欲を高めるということを身をもって感じた。また、4人とも中国から来日した学生であったため、休み時間などは中国語でコミュニケーションをとっていたが、母語が同じであったことは彼女らの情緒面での安定にもつながったと思う。

Bクラスの場合

担当：二田さち子

〈Bクラスの学習者〉Bクラスの構成員は3名で、小学3年男子、小学4年女子、小学5年男子が各1名ずつであった。滞日期間はこの教室に参加する時点でそれぞれ3～4ヶ月で、出身国はいずれも中国である。3名のうち、2名は同じ小学校に通っている。この3名の学習者は、日本語の指導を必要とする学習者なので、通常の授業でも「取り出し」という形で日本語指導を受けている。

〈Bクラスの学習目標と計画〉今回のこのクラスでは、既習表現の確認と語彙・表現の充実を目標とした。積極的に扱ったものは、動詞（辞書形、ます形）と助詞である。3名の学習者は来日して3～4ヶ月という段階なので、ようやくまわりの日本語を意味のあるひとまとまりの表現（主に単語）として捉え始めている時期にあると考えられる。それらの「単語」を「文」にすることができるようになることがBクラスの主要な目標である。

第一日目；①「…が好きです／嫌いです」という表現の復習、定着（学習者の嗜好を知る）

②動詞ビンゴで、基本的な動詞についての習得度を把握

第二日目；①動詞の辞書形→ます形への変換練習

②「…を～ます」

③場所を表す「に」の導入

第三日目；①「…に一があります」

②「…で一を～ます」（手段を表す「で」）

③擬態語＋動詞

第四日目；①「…が～たい」（願望を表す「～たい」）

②作文作成

必要に応じて、これらの学習活動の合間にゲーム（しりとりなど）を取り入れた。プリント学習が中心で、中国帰国者支援ホームページ「同声同気」の中の帰国生徒向け教材ページ (http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/new-resource_f.htm) より抜粋して作成している。

〈学習の実際〉

第一日目…(1) 「あいさつ」

「おはようございます／こんにちは／こんばんは／ありがとう／ご

めんなさい」などの絵の中の吹き出しへ適当な表現を記入。

(2) 「どこから来ましたか」

「…は〈国名〉から来ました」という文型を使って自分と友達についての文を作成。

(3) 「好きですか、嫌いですか」

好きなもの(くだものなど)を挙げていき、口頭で「…が好きです／嫌いです」の文型を練習し、プリントに書かれている動物の好き嫌いを「私／***さんは、…が好きです／嫌いです」という文の作成。

(4) すごろく

『にほんごでまなぼう』の中のすごろくをやりたいという希望があり、サイコロの目を「ひとつ、ふたつ、みつつ…」と読む練習をしながらすごろくをする。

(5) 動詞ビンゴ(前半)

16の動詞について、一つひとつカードで確認しながら、ビンゴシートに記入。

第一日目は、全体的に書くのに時間がかかり、長音、撥音などの特殊音についての表記はまだなかなか難しいようであった。助詞や動詞の活用についても、まだまだ学習したことがなかったように見受けられた。書かせるものが多かったので、現状は把握できたが、やはり集中力を持続させるには無理があった。

第二日目…(1) 動詞ビンゴ(後半)

前の日に準備しておいたシートを使ってのビンゴゲーム。

(2) 動詞探し

五味太郎のことば図鑑「うごきのことば」を使い、こちらが提示した動詞の絵を探す学習活動。

(3) 動詞の辞書形→ます形への変換練習

日常的に使われる動詞(見る／食べる／飲むなど)をます形にして記入。

(4) 場所を表す「に」の導入

絵を使って、冷蔵庫の中のものを表す文を作成。

単語でも知ってはいるが、書くとなると難しく思っていたより時間がかかった。第一日目で助詞についてあまり意識がないようだったので、今回の学習で多少意識でき

るようになったのではないかと思われる。

第三日目…(1)「…に一があります」

学校が描かれている絵を使って、口頭で作った文を作成。

(2)「…で一を～ます」(手段を表す「で」)

「はし／スプーン／フォーク／手で食べます」などを口頭で作り、文を作成。

(3) ひらがなことば陣取りゲーム

ジャンケンで勝った人がマスに自分の知っている単語を書き込み、陣取りをしながら練習。

(4) 擬態語＋動詞組み合わせゲーム

例えば、「しくしく泣く」という絵カードを提示し、「泣く」という文字カードを見つけた後、「しくしく」という文字カードを探し、文を作成。

今回は、用いる単語について、品詞別にカードにして並べる作業から行なってみたところ、興味を持ったらしく、いつになく一生懸命取り組んでいた。特に助詞については、単語を入れ替えながら作業を進めていくうちにパターンがわかるようになったようで、誤りも少なくなった。

第四日目…(1)「…が～たい」(願望を表す「～たい」)

くだものの絵カードを見せながら、「食べたい?」「食べたい。／食べたくない。」というQ&Aで口頭練習。その後、いろいろな動詞を使って「～たいです／～たくないです」という変換練習。

(2)「春休み」の作文作成

春休みについて、[好きか嫌いか] → [どうして、好き／嫌いか] → [春休みは何がしたいか]、について質問形式にしたプリントに書き込んだ後、作文を作成。

たった四日で作文まで持っていくのはかなり無理があった。最終的な目標で作文を設定するなら、途中のやり方をもう少し工夫する必要がある。また、春休みに何をしたいかという漠然としたテーマだったので、あまり具体的に考えた事のない学習者にはこれもまた同様に無理があったかもしれない。しかし、四日間を通して、動詞と助詞にこだわってきたので、学習者の日本語も単語レベルよりもより文レベルへ近づい

たのではないかと知っている。

〈授業全体の反省〉学習者が子供であったので、同じ学習項目であっても、大人の学習者とは違った工夫が必要だと身にしみて感じた。3名の学習者の中でも、特に小学3年の男子については、他の二人の学習者に引け目を持っていたのか、できないと思ったら途端に他のものに目が移ってしまい、学習活動への意欲を喪失してしまいそうになることが多かった。また、小学4年生の女子については、他の2名の学習者より習得が速く、さらに難しい学習内容でも充分ついていける様子であった。つまり、3名の学習者の日本語力の差があまりにも大きかったため、グループ学習の中でのレベル設定が難しく、学習効果・意欲を持続させるのが困難であった。また、小学校5年生の男子は、小学校3年の男子に比べて、母語でもあまり話すわけではないらしく、日本語の発話では自分から話すことはあまりなかった。しかし、読み書きとなると、小学校5年生の男子の方が、小学校3年の男子より正確に書くことができた。これは、一見発話が流暢な学習者でも、そのような学習者全員が、体系的に日本語を理解しているわけではないということである。しかし、日本語母語話者である私たちは、彼（小学校3年生の男子）の日本語は他の学習者より習得が進んでいて問題はない、と安易に思ってしまいやすい。大人の学習者では同じことが言えることは分かっていたが、子供でもやはり聞いたり話したりすることで、日本語の構成や文法を正しく習得できるものではないのである。今回の子供日本語教室の参加者13名から、この3名をBクラスに設定したのは、3人の学年と滞日期间がほぼ同じだったからである。しかし、滞日期间、学年がほぼ同じであっても、日本語の習得には個人差があり、効率のよいグループ学習は望めず、むしろ、日本語習得の段階に合わせて、グループを構成する方法をとることの方が賢明であるということが今回の活動でわかった。次回からは、通常の日本語指導を行なっている先生の協力を得て、学習者の日本語力を事前に把握し、グループ分けや指導を行なうことができるようになれば、さらに充実した学習活動が期待できる。

Cクラスの場合

担当：田川恭識

0. クラスの概要

今回の「こども日本語教室」において、筆者が担当したクラスの概要を表1に示す。開講日時、時間等は前述の通りである。韓国語母語話者が2名だけであること、姉妹であることによる学習環境の共通性を考慮して、2名だけで1つのクラスを編成した。

クラス名	学習者	年齢	滞在歴
Cクラス	韓国人子女2名(姉妹)	14歳、13歳	1ヶ月未満

表1 クラスの構成

1. 授業の実際

以下に、筆者が行った授業について概略をまとめる。

3月27日

授業の概要：初回の授業であることと、こども日本語教室のテーマである「書く」ということを考慮し、文字の導入を行う。発音練習により、音の定着を図る。

指導項目：ひらがな・カタカナの導入、単語の導入

使用教材：絵カード、文字カード、プリント2枚

授業の実際：学習者は日本へやってきてから約1ヶ月であること、こども日本語教室のテーマである「書く」ことを考慮して、初回の授業で文字を導入し、発音練習を行うことで音の定着を図る予定であった。しかし学習者は日本へ来る前に、韓国の日本語学校で4ヶ月間日本語を学んでおり、文字に関しては既習であった。授業中の学習者との会話や問題に対する回答を見る限り、初級の文法に関してはある程度習得済みであるようだった。

授業では絵カード及び文字カードを使用して発音練習を行った。また簡単な作文を書かせた。

3月28日

授業の概要：前日の授業の様子、作文の出来から判断して、初級の文法に関してはある程度習得しているようである。本授業では「食べ物」を主題に取り上げ、

語彙の導入、発音練習、作文指導などを行う。

指導項目：食物に関係する単語の導入、動詞、形容詞の導入、頻度の副詞の導入、「たべもの」を主題とした作文

使用教材：語彙導入用プリント、ワークシート、原稿用紙2枚、レアリア（生活雑誌）、文字カード数種（動詞、名詞、形容詞など）

授業の実際：前日に出した作文（自己紹介文）を添削したところ、単語の書き間違いなどを除いて訂正箇所は余り見当たらない。以上のことから、初級の文法に関してはある程度習得していると考えられる。単語の書き間違いの主なものは、長音記号の欠落、濁点の欠落、促音を表す「っ」などの欠落などである。また清濁の混同も見られる。音が定着していないことが窺える。発音指導が必要である。また、文法に関してはある程度習得していると思われるが、聞くことや話すことに関してはぎこちない印象を抱いた。

「食べ物」は学習者にとって身近であるため、興味を引きやすい。いろいろな国々の食べ物を特集した生活雑誌を持って行って見せた所、2人で楽しそうに見ていた。

3月29日

授業の概要：本授業では、「地理」を主題に取り上げ、発着表現や位置を表す表現を導入する。発音指導、作文添削なども併せて行う。

指導項目：発着表現（「着く」「向かう」など）の導入、建築物・地理に関する単語（「信号」「角」「突き当たり」など）の導入

使用教材：表現導入用プリント、ワークシート、単語カード、原稿用紙、レアリア（学習者宅の周辺地図）

授業の実際：授業における学習者の様子からすると、簡単な文型や単語を組み合わせ文を作ることに慣れていないようである。作文を書かせても、「～は～です」のような単純な文型を使って単文を作るケースが多い。文法知識はあるが、それを応用するまでには至らないようである。書くだけでなく、話す際にも同様の傾向が見られる。これらのことから、アウトプットすることが不足しているように感じられる。

この授業では「地理」を授業の主題に取り上げた。前日の授業で、学習者と教室までの交通手段について話した。学習者は教室まで通うのにバスを使っているが、自分達だけでバスに乗るにはまだ自信がないとのことであった。「行く」「着

く」などの発着表現の習得は、移動する際に便利である。併せて「となり」「向かい」など、物体の位置関係を表す語も導入した。授業ではレアリアとして学習者の自宅周辺の地図を提示した。学習者は楽しそうに2人で地図を見ながら話していた。

3月30日

授業の概要：授業時間が短いことから、復習中心の授業を行う。特に「～てください」を初めとする依頼表現を扱う。併せて動詞の導入、漢字の導入、発音練習を行う。

指導項目：聴解、文型「～てもいいですか」「～てください」の練習、語彙の導入、漢字の導入、発音練習

使用教材：カセットテープ、テープレコーダー、聴解用スクリプト、回答用紙、単語カード、絵カード

授業の実際：こども日本語教室の授業時間は1日2時間であるが、この日は終了式が予定されていたため、通常より早く授業を終えた。授業時間が短いこともあり、新たに学習項目を導入する事を避け、既習と思われる文型の復習を中心とした。取り上げたのは動詞のテ形と「～てください」「～てもいいですか」などの依頼・申し出の表現である。また今後、学習者達は日本の中学校に編入し、学習する。学校では同年代の児童に囲まれて生活する。話しのスタイルは丁寧体よりも普通体の方が多いと考えられる。「～てください」「～てもいいですか」などの依頼・申し出の表現に対応して「～て」「～てもいい」などの普通体の言い方も説明した。併せてイントネーションについても説明し、練習を行った。

2. 問題点

以上、クラスの概要と行った授業について簡単に述べた。本節では、以上の授業を行う過程において見られた気づきや問題点を幾つか取り上げ、考察を加える。

2. 1. 学習者の日本語学習歴

授業に先立ち、学習者の滞在歴、年齢、母語、学習レベルなどの観点からクラス分けを行った。筆者が担当した2名は、姉妹であることによる学習環境の共通性、年齢の近さ、母語などを考慮して同一のクラスにした。2名とも滞在期間が約1ヶ月であることから、日本語の学習歴はほとんどなく、日本語に接した経験も少ないと予想し

た。授業初日、筆者が予定していた学習項目は、ひらがな・カタカナの導入などであった。しかし、2名とも韓国の日本語学校で約4ヶ月間、日本語を学んでいた。学習者の滞在歴は日本語のレベルを見極める際、重要な判断材料となる。しかし一方で滞在歴は学習者の一面を表しているに過ぎない。本クラスの学習者は姉妹であり、両親の出張に伴い日本にやってきた。日本で暮らす準備として、両親ともども同じ韓国の日本語学校に通い日本語を学んで来たらしい。このような学習者の隠れた一面を知ることが、事前の面接を行わない場合難しい。しかし冷静に考えれば予想できたことである。日本語のクラスを持つ場合、事前に得られる学習者の情報はごく限られたものである。限定された情報をもとに授業を組み立てても、予想を大きく裏切られることがあることを示している。様々な可能性を考慮しつつ、授業に臨む姿勢が必要である。

2. 2. 教材について

最初の授業で筆者が用意した教材は、文字の導入及び練習用の教材であった。具体的には絵カード、ひらがな・カタカナが1音ずつ書かれたカード、ひらがな・カタカナの一覧表などである。上述の通り、学習者のレベルが予想に反して高かったため、文字の導入は不必要であった。文字の導入のために用意した教材もほとんど使えず、目的のはっきりしない中途半端な授業になってしまった。

用意した教材は文字の導入という本来の目的には使用できないかも知れないが、同じ教材を使用して色々な教室活動が出来たはずである。予想と違ったことで焦りが生じ、結果として柔軟な対応が出来なかった。

2. 3. 学習内容

本クラスの学習者は、韓国で約4ヶ月間日本語を学習していた。授業の様子や宿題などの出来からも、初級の文法に関してはある程度習得していることが窺えた。しかし、文法に関する知識はあっても、それらを組み合わせて複雑な文章を作るといったことは見られなかった。1つ1つの文型は正確に覚えているが、応用力が不足しているように思えた。これは学習者との会話においても同様に感じた。学習者は単文で話すことが多く、ごちない印象を抱いた。日本語を使って日本人と話すことに慣れていない様子であった。日本へ来たのが1ヶ月前ということもあり、インプットもアウトプットも不足していることが影響していると考えられる。

今回の学習者は少なくとも1年間、日本で生活する。日本の中学校に編入し、日本

語で教育を受ける。周囲とのコミュニケーションも日本語で行う。今後の学習者の生活を考えると、学習者に必要なのは、習得した日本語に関する知識を、実際のコミュニケーション場面で発揮するための言語運用能力の育成であるように思われる。以上からすると、授業内容はもっとコミュニケーション的なものが望ましかったのではないだろうか。

大人の学習者の場合、「会話の練習がしたい」や「文法を中心に学びたい」などと、教師に対して直接要求することがある。自分に必要な能力、また勉強したい学習内容が自覚されていると言える。その点、大人の学習者の場合はニーズを知ることが容易である。一方で年少者の場合、自分の意志で日本語を学習するケースは稀なので、一体自分には何が必要で、何が勉強したいかといったニーズが明確でない場合が多い。もちろん、学習者の日本語レベル、学習状況、生活環境などの諸要因により、教えなければならない指導項目は存在する。潜在的なニーズであると言える。年少者の学習者の場合、潜在的なニーズを常に考慮し、適切な学習項目を選択することが何よりも重要であると思われる。

3. 総括

以上、実際に筆者が行った授業内容、及び授業の過程における問題点を簡単に述べた。上記に挙げた以外にも多くの問題点があったが、ここでは紙幅の都合上割愛した。

年少者に対する日本語教育は様々な問題を抱えており、近年取り上げられることが多くなった。例えば、第2言語習得と自我形成の問題、国語教育を初めとする学科教育と日本語教育の関係など、問題は多岐に渡る。年少者に対する日本語の教授法もまだ確立に至っていない。今後、研究の進展が望まれる。

Dクラスの場合

担当： 瀧上裕子

1. クラス編成

Dクラスの学習者は、以下のとおりである。

学習者	学年	性別	滞在歴	母語
<a>	小4	男	8ヶ月	中国語
	小4	男	6ヶ月	朝鮮語（中国の朝鮮族で、中国語も可）
<c>	小5	男	9ヶ月	中国語
<d>	小6	女	8ヶ月	中国語
<e>	小6	女	1年4ヶ月	中国語
<f>	小6	女	2年4ヶ月	中国語

滞在歴にばらつきがあるものの、皆日常会話に支障が無い程度の日本語力を有している。彼らは、中国語という共通語を持っているのだが、授業中及び休み時間中にそれを使用する場面は無く、すべて日本語に依っていた。日本語の意味がわからないでいる子に、日本語で意味の説明をしてあげている場面まで見られた。それは、彼らの日本語会話力の高さもあるだろうが、一つは日々の学校生活により日本語だけで問題解決にあたることに慣れているためであろう。彼らくらいの会話力と生活経験があれば、クラス編成の際母語を特別に配慮する必要は無いように感じた。

2. 問題点と授業の方向

彼らの場合、このように会話力、コミュニケーション手段としての日本語能力はついているので、今後これをどのように読み書き能力につなげるかが問題となる。学校では、教科書を読んだり、作文や日記、感想文など書いたりという作業が多く取り入れられており、彼らにも今後そのような技能が求められるであろうからである。そこで、「読む」ことと、さらに進んで「書く」ことを最終目標とした授業を計画することにした。

ただ、今回は、学習者が書くことに対してマイナスのイメージ（苦手だ、嫌だ、面倒だというような意識）を持っていた。そのため、まずはそのイメージを払拭し、書くことに親しむ必要がある。また、作文になれていない学習者の場合、何を書いているのか分からない、書くことがないということになりがちであるため、事前に書く題材をある程度一緒に考えてやる必要がある。さらに、学習者の年齢を考えると2時間

ほどの授業時間いっぱい集中力を持たせることが難しいという点を考慮する必要がある。

そこで、「書く」準備段階において学習者のコミュニケーション能力を最大限活用することにし、楽しく「話す」ことで学習者を惹きつけながら、書く内容を膨らませておき、「書く」ことへとつなげていく授業をすることにした。その際の留意点は以下の通りである。

- 1、学習者が興味を持つようなテーマにすること
- 2、書かせる前に、テーマに沿って十分話を広げておくこと
- 3、書かせる前に、例文（場合によっては構文も）を提示しておくこと

3. 授業の実際

今回の日本語教室は、初対面の学習者を対象にわずか4日間だけの授業であったことから、毎日違った角度から「書く」ことへとつなげていく多少実験的な授業構成になった。そのため、まずは1日ごとの教室活動について述べ、最後に全体についての考察を行うことにする。

3-1 1日目の授業

1日目は、学習者の生活について知るために友達や遊びなどを話の中心とした。また、書くことに慣れさせるために、読み手に話しかける形式の、話し言葉に近い「友達への手紙」と「友達募集記事」を教材として取り上げることにした。

手紙というと、大人の学習者の場合はフォーマルな場面となることが多く、手紙の形式や言い回しなどについて学習するというイメージがある。だが、ここでは『友達への手紙』と限定し、普段から親しくしている友達に話をするように書くというインフォーマルな場面として捉え、敬遠されがちな「書く」という作業にまずは親しんでもらうことを目的とする。

今回、長期休暇（春休み）中ということもあり、しばらく会っていない友達に手紙を書くというのはいい動機付けになるとも考えていた。しかしそれについては、実際には「電話でよく話すし、そっちの方が楽しい」「毎日一緒に遊んでいる」との意見が出るなど、思惑がはずれた形となった。

3 / 27 (月) ①『友達への手紙』—友達に手紙を書こう！—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学校生活や友達について話を引き出す 2 封書と葉書、便箋と封筒について説明 3 手紙の例文を読ませ、基本構成を説明 4 実際に手紙を書かせる 5 宛名について説明し、記入させる 6 切手について説明し、各自投函 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手紙に関する基本的知識（封書と葉書、便箋と封筒） ・文章の構成を考えに入れて書く能力 ・手紙に関する基本的知識（宛名の書き方、切手）
3 / 27 (月) ②『友達募集記事』—もっと友達を作ろう！—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 どんな友達が欲しいかなど聞き出していく 2 雑誌の友達募集欄を見せる 3 記事を読ませ、基本構成を説明 4 実際に記事を書かせる 5 原稿用紙の使い方を簡単に説明 6 原稿用紙に清書し提出 7 翌日、雑誌と同じ形式のプリントにして配布 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成を考えに入れて書く能力 ・原稿用紙の使い方に関する知識 （原稿用紙に正しく書く必要性が感じられるよう、また達成感が得られるように）

3-2 2日目の授業

ある出来事があってそれについて誰かに伝えるという作業は、「昨日こんな事があってね・・・」などと友達に伝えるように、彼らが日常的に行なっている作業であり、それを文字にして伝えるものが日記や作文（「修学旅行を終えて」などのような作文）である。そこで、2日目は、文章で出来事を伝える能力を養うことを目的とした授業を行なった。素材には、学習者が親しみやすいであろう漫画を用いた。実際に授業をしてみると、『状況説明』の方では問題無かったのだが、『物語作り』の際、何をどう書いていいのかわからないという学習者が出てしまった。ひとりひとり違う話にしたため、どういう話なのか話を広げていく段階で十分対処することができなかったことが原因であると考えられる。皆で同じ漫画を使って、もっと場所や登場人物、会話の内容などについて意見を出し合うという形にしたら解決できたのではないだろうか。

3 / 28 (火) ① 『状況説明』 —はじめまして—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ふきだし付きの漫画を配布 2 ふきだし部分を読ませる (ロールプレイ). 3 登場人物、その相互関係、場所、何をしているか等それぞれの考えを出し合う 4 順を追ってそれを説明する文章を書かせる (この時、過去形になることに注意させる) 5 提出し、チェック後返却 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物事を順を追って説明する能力 ・過去形を正しく使う能力
3 / 28 (火) ② 『物語作り』 —ピングー—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 漫画「ピングー」(ふきだし無し、1話が6コマ程度)を8話ほど用意し、各自好きなものを選ばせる 2 例として一つ教師がお話をする 3 各自物語を作って書かせる (この時、過去形になることに注意させる) (途中個別にどうい話なのか引き出していく) 4 各自発表 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物事を順を追って説明する能力 ・過去形を正しく使う能力 ・音読練習

3-3 3日目の授業

3日目の授業では、学習者が皆口をそろえて国語が苦手だと言っていたこともあり、典型的国語学習とも言える『読書』(音読、内容理解、感想文)を取り上げた。

音読については、皆慣れているのかスムーズに進んだ。内容についても、基本的事項について質問用紙に解答させると皆全問正解で、よく理解できているようだった。ただ、感想文となると、「かにのともだちはとてもやさしいともだちでした。かんどうしました。」のような回答がある一方、「かにの友達とてもやさしい人です。さるはとてもずるい人です。かにはかわいそうな人です。」「この物語はかにがうたれて、かわいそうと思って、ともだちがたすけてやった。」のように説明になっている例も見られた。今回のようにいきなり感想を書かせるのではなく、皆で話しながら感想を出し合っていくという形にしたらより豊かな表現ができたのではないかと思う。

また、「簡単」「短すぎる」「面白くない」との声が聞こえた。難易度、量、面白さなど全てにおいて適当な教材を選定することの難しさを感じた。ただ難易度については、この読書の後は皆いつもとは比べものにならないほど疲れていたため、彼らの言

うとおり難易度を上げたところで果たして消化できたか疑問もある。

3/29 (水) 『読書』—さるかに合戦—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 昔話「さるかに合戦」のプリントを配布する 2 単語（水瓶、囲炉裏、臼）を絵を使って紹介 3 読み聞かせる 4 内容について口頭で簡単に質問 5 質問用紙を配布し、基本的事項について各自回答 6 絵などを使いながら再度読み聞かせる 7 生徒に少しずつ読ませながら答え合わせ 8 各登場人物に対してどう思ったかと全体での感想を書く 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物語文を読み、内容を理解する能力 ・音読練習 ・簡単な読書感想文を書く能力

3-4 4日目の授業

この日は、わずか4日間とは言え最後の授業だったので、ある程度の量の『作文』をさせようと思っていた。題目を「もし1000万円当たったら」としたのは、夢や希望についてなら皆いろいろな考えを出してくれるのではないかと、書く題材に困らないのではないかと考えたためである。

実際、活発に意見が交換され、書く段階になっても教師が準備した用紙だけでは足りずにさらに用紙を要求する学習者も出るなど、皆意欲的に取り組んでいた。

3/30 (木) 『作文』—もし1000万円が当たったら—	
<p>—授業の流れ—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 プリントを配布（単語、質問、例文を記載） 2 使えそうな単語を提示し、意味を確認 3 1000万円当たったら？という話をする 4 作文例を読み、それについても話し合う 5 実際に作文を書き、発表 	<p>—目標知識・能力—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仮定や願望の表現 ・音読練習

3-5 全体の考察

全体的に見て反応が悪かったのは『手紙』と『物語作り』である。『手紙』の方は、まず皆の書こうとする意欲を十分引き出すことができなかった。手紙を書く必要性・有用性が感じられないという点が原因であったと思う。また、『物語作り』の方は、

何を書いているのか分からないという生徒が出てしまった。それぞれ違う物語を担当させたため、教師1人がばらばらに活動している生徒6人に対処して回るという形になった。そのため、書く内容をイメージしていくという準備段階が不足してしまったためであると考えられる。

それとは反対に反応が良かったのが『募集記事』と『作文』である。『募集記事』は、量的に少なく技術的にも易しかったというのがあるのだろうが、皆書くことに抵抗を示さず一生懸命書いていた。皆の「もっと友達が欲しい、友達とこんなことをしたい」という気持ちをうまく引き出した結果だと思う。また雑誌に投稿しようという形にしたことも、皆の興味を引いた一因であったと思う。『作文』の方は、あんなに嫌がっていた作文をこんなに一生懸命書くものかとあきれほど、皆一心に書いていた。テーマが“もし1000万円当たったら”ということで、夢や希望を出し合うこととなり、彼らの興味を大いに引くものであったからであろう。準備段階に十分な時間を取って活発に意見を出し合っていたため、書く内容にも事欠かなかったようである。

4. 最後に

以上のことから、授業内容選択の重要性、書く準備段階（ここでは内容に関するいろいろな意見を出し合ったこと）の重要性を感じた。彼らは始めの時間からずっと「書くのは苦手だ。嫌いだ。面倒だ。」と言い続けていた。しかし、彼らが生きたものを見ると、助詞や濁点など多少間違いがあっても、決して書けないのではない。それどころか、指導によっては自ら進んでどんどん書いていくのである。興味が湧いてくると、それまでにぎやかに話をしていても、書くよう指示した途端静かになり一心に書いていた。内容に興味を持ち、書くことがイメージできさえすれば、嫌がることなく、むしろ楽しんで「書く」ことができるのである。まずは、書くことに親しませ、書く機会を多く持つことで、次第に技術的な面（段落の分け方、考えの述べ方、論の進め方など）の指導へと進めることができるようになると思われる。

§ まとめ

近年、全国で日本語指導を必要とする児童、生徒は増加しており、日本語を母語としない年少者を対象とした日本語教育のために、さまざまな施策が講じられてきている。小中学校に対する教員の特別配置や日本語教師の派遣、日本語の教材開発などである。しかし、さまざまな問題も指摘されるようになった。例えば、日常使う日本語には不自由しなくなったように見えるのに、授業にはなかなかついていけないとか、母語を忘れることによって親子のコミュニケーションが十分にできなくなったり、また文化的な帰属が曖昧になり、アイデンティティーが拡散してしまうなどの問題である。今回の「春休みこども日本語教室」は4日間という短い期間であったが、実際に年少者に教えてみて、これらの問題を肌で直接感じることができ、これまで大人の学習者しか教えたことのない筆者らにとって、とても貴重な経験となった。今後、日本語教師として新しい視点が得られたように思う。

謝辞

授業を行うに当たり、黒髪小学校の先生方をはじめ、たくさんの方々のご支援を頂きました。記して感謝致します。

参考文献

- 吉岐 久子 (1988) 「年少者に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育66号』
- 池上摩希子 (1994) 『『中国帰国生徒』に対する日本語教育の役割と課題
—第二言語教育としての日本語教育の視点から—』『日本語教育83号』
- 岡崎 敏雄 (1995) 「年少者言語教育研究の再構成
—年少者日本語教育の視点から—』『日本語教育86号』
- 野元 菊雄 (1996) 「ほめるという言語行動」『日本語学』5月号
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編集 (1998) 『外国人児童生徒のための
日本語指導 1—カリキュラム、ガイドラインと評価—』(株)ぎょうせい
- 伊東 祐郎 (1999) 「外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育100号』